



新橋田藤
下

坎



5
1839
2





新橋思藤秋之部



秋の月や百日の花の
大の秋の是處を
大津弦のうちを
浪磯の妻に
初あき河原に
古刀根舟も
天の川

天の川湯嶋の臺よきくさなり

深川三十三郎堂

阿まは川もやまを矢の舞の如
七日月入あしあしや 梳の露
七夕のあけちきき男世帯り
短尺城おのまし 起やらの夜
七夕のあまききさき 双六
あれまたは風や実の入芋 畠

舟人や返しよさつおまを
かき通やみちのくあのをきうつ
宵過るおまをき 何小袖
あまのきき 星のまをき 長恨舟
かきよきたしやあし 長恨舟
あまのきき 星のまをき 長恨舟
梳の露よきけりたぬや女文字

あまのきき 星のまをき 長恨舟

子供等の施縁免状すぬる亭売は
 次棚やいふたも燈子の森白
 多よ棚の目南くまや猪田
 玉たや口の阿らちの海も
 人よくりんも森も
 昔いふまの女の中
 是非の折高

喧嘩したるもあり玉

民枝の折高に祖母

玉たや老いといはけり

折高のよ一或打交は先た

梅
 迎
 迎
 迎

西の道はし甲の門火の都
つゝも人々も心もさうさう
燈籠の光もさうさう
越後屋の籠の只ひも
此やうな城もさうさう切籠うな

車力仁平次妻城うさうさう

さうさうさうさうさうさうさう

さやぼん切籠の四子うさうさう

冬月うさうさう橋の毛うさうさう

盆舞うさうさう月もえうさうさう河原色

多岐氏枝もさうさうさう初光もさう

たなうさうさうさうさうさう

阿茶屋

冬月柳もさうさうさうさうさう

身のさうさうさうさうさうさう

さうさうさうさうさうさうさう

小男の夢殿もちぬ角力や
 備ぬるふ月のうちをや
 後さきの仕うもさう角力取
 下帯も多結海や
 結書や鳥帳のうち結
 結書や萩蕙の実誠吹こり
 結書はぬきし
 結書やなくるさきう寸
 結書の由

いたはたさる目さう
 稲あやいつ抜出
 掛の釘
 掛の釘
 左浦子のおもひ
 のたのし海土之節
 又字の偶田川
 まゝの巻紙に結縁

舟中記

船のふのこもあきま〜も九条ふら
船白や降〜も入申の茶のまのり
あき船や船のつ〜もやまやま
河津ふの村まら〜も
ま〜も〜も〜も〜も〜も〜も〜も
船白や〜も〜も〜も〜も〜も
あはふも〜も〜も〜も〜も〜も
船船の人を〜も〜も〜も〜も〜も

船の海や〜も〜も〜も〜も〜も
船の海や〜も〜も〜も〜も〜も
船の海や〜も〜も〜も〜も〜も
船の海や〜も〜も〜も〜も〜も
船の海や〜も〜も〜も〜も〜も
船の海や〜も〜も〜も〜も〜も
船の海や〜も〜も〜も〜も〜も

二十五年の故〜も〜も〜も〜も〜も
や〜も〜も〜も〜も〜も

のたまたまは城のち城

ありてちまゝに力減れぬの物な

八月五日 非之岡志

阿さくほやまゝくつゝ力も風船に

あつゝ木樵をとりて口をのりぬ

そらち賣る人かゝゝ赤木樵

中たゝゝ又阿さく木樵の物

是もまゝあつゝけゝるも此の物也

志中のりゝもたゝぬ垣根のあつゝけ

いゝゝゝのさあ地所木樵の種

押さやあつゝあゝの地所ゝのゝ

不思議

あつゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

物ないつゝゝゝかやゝゝゝゝ

芋の葉は口や汁もゝゝゝゝ

あつゝゝゝゝの口毎減りて

こふきしわ鮎のききき集のきき
雀眼や人のきおききかき花
白きく萩やきききき板やき

岩城象といふ可坊を

小城下や桔梗きききき板ききき

かーか村をぬきききき

田の家よちのきききき桔梗

婿きききききききききき

ききききききききききき

若きききききききききき

ききききききききききき

酒きききききききききき

過る庵ききききききき

古きききききききききき

駒買結のききききききき

七月廿日深川ききききき

うけけしきとて二句

日無し西よりしきしきと危き花
秋風や人なりしきしきしき
大筒のうき後もさき花さき

中々の入江路をの四路

ちかたつぬりしきしき

暮の種や子児素夜と輝りしき
唐の味あはれ白の井

庄寺も下船やありし唐辛子
浦風や春を吹かすはて唐の

矢吹新田の

鬼灯のきとあはれしきしき
今おもしろくつきの花白く

福祿阿のいしきしき

ハ熱時焔のいしきしき

千よしのいしきしき

世の素懐を道にあらわす
花の素懐を道にあらわす

盛に計ふは供の福の多きは

送別

花のけしき門田のいねや
早稲のうねをあらわす村境

ち田の小野村と捨地うたふ

見く

種より日麗中をや畦つて
いねの種よりあらわす村境
稲の多やあらわす

送別

見くや又いねを望む花
花のけしき門田のいねや
いねの種よりあらわす村境
稲の多やあらわす

くはまやむきささ寸名すまろ

六月の中旬よりあつた

雨は利根の荒川無き

らなり霞の川一時あま

き出さるる坂塘之え氏

屋をたき田畑いも

荒たす湖面あつた

しおんやけり数艘の舟を

催し縣令の目をも

流離の業をたきけり

三町をかくれ人あ

し船をたきあつた

あまのまふ御代のま

とて

あまのまふ舟の人あ

初嵐のまふたのま

尾村亭

阿ふらやや 歩芽う原と垣一重

栞杖尾

秋風やささ〜 東山と尾の角

若非子一七日逮夜

目出れたふ事〜 秋の風

ひららの園行方初西葉ちの常行

三昧會々貞觀年中一并の極まり

ふら〜 急慢を〜 行を

ふら〜 葉月十四日に訪〜

秋は是やい〜 経の〜

歩芽生やい〜 秋は風

阿き風や〜 笠の〜 人

阿き風の吹〜 阿波路島

あき風や〜 安ふ〜 け場

節を〜 秋の〜 是

鏡う是や船荷と物と燈の狂ひ
似て是のたゞも心多しとるも此露
お露のちも青や 立仙とりのうら
まの陰やお前並とく〜免畏
い〜るも垣根の法由お土細工
貞昌大姉の茶毘とてわひ
よ〜るふ舍利とてと
け〜ちわあ〜と〜ちと〜お露の玉

け〜ちわあ〜と〜ちと〜お露の玉

犬逆子の母や赤〜まきまの露
ぬ〜れ〜露と露つ〜露ち〜
露おろす〜中〜粥やお対白
川お務や粟喰〜村お〜め
虫ち〜や株真白の露と〜
サ〜〜や庫裡着〜〜余〜

有るも世ありしにするものこと
古海やうろつては猶も 衆

火災後筆を遺るに

新庭や都を去るの故の後
淡の露もむぎも 氣のこ
蚕とてうろつては 柳出ると
いと 裾へ来るとは ぬき 蟻 餅
花苗もあふらうとて 春のこ

は表も我も世も きのこ
みの虫跡も 新庭を 帰る
葉の依りては 舟の 舟
圭岳子の 写しを 遺るに

ありき

端場や小坂を 画筆も
端柳の 花も 遺るに 風も
あふ月や 鞍も 遺るに 花

為るの河へうもくしりてなると那
らんけうのり早くあふ野中へ
畦まの鞘もぬらや赤とんが
うゝ山や小鳥の狭くあつてんは
せんけうの甘りたぬぬ浮世をな
我もきりしぬぬをうらむ秋のきこ

小亭

日ありのよきに菜園や秋のよふ
力よきや秋のよふに小亭をな
年々くまぬぬに鶴をな
秋の月を園の床にあつてり
赤い雀のうらみはあつて
まうきし小亭をなけや鳴鶴
消そのまやうらみはあつて
鳴立て身よのうらみはあつて
うらみはあつて袖はあ

鳴たぐやうりるちふふぬまつ

鳥飛仙江たぐやうりて遣音わ

まやこま初野り埋葬さ

まよきのま秋まよひのま

性あま生ふ滅ちりまよひのま

まよひの川のたぐやうりて東

山の月ま露浦まよひのま

ま般若のま理まよひのま

巻のぬま

人いらは風力ありてはるる

后九月十八日池端

鴨をまよひまぬやうちりり早椿

所思

おろるるまよひまよひの秋

身まよひつ終るまよひぬ竹婦人

坂のまよひや秋まよひのま

八朝の朝々晦々 庭よりなる
三日月の影の如く ありて若くは風

渺崎

待宵やまはるは露の如く 若くは露
待宵やまはるは露の如く 若くは露
まはるは露の如く 若くは露の照

法無法は妙收妙法

妙法蓮華の妙法

おふ月月、物とて何れも

常恒不変

死をぬかすといふは、死をぬかすの月

月をぬかすといふは、死をぬかすの月

人丸明神の如くありまはる

日暮里降光の如くありまはる二句

為逆冥加の如くありまはるの月
ぬかすといふは、死をぬかすの月

柳身つゝ狂の月見ようらの山
を信とて寝し一室へやる月
月今宵もあつ傳も人老老り
むしりもけりもつゝはるはる
うぬづも大切を思ふころはる
月見をや折目の付し袖惹て
蘇我の比く柿むく而の月見が
ころの月見と泣ぬ人

外橋田

宵の月見もあつよつゝはるはるの月
月見もいぢしゝかお浮世人

名月もむら阿を思ふや掃却の
り善取訪社

名月やのるゝあ人の聲
こゝろもあつゝ

夜もあつゝ

名月や後より暮るくおのすそ

水天中湊る

名月やはや〜聞か濱館

芳華をすつ〜

名月や小倉法美の一折家

喜みの暇に成んて

名月や高も昔々葉の給仕

名月や休戸の〜

名月やち〜酒の〜

名月や植出〜綿の風を〜

羅漢ち

名月や家松の鶴の好つ〜

名月の入る山遠〜墨田川

名月よを歩行きの笑を〜

名月よを月も明〜香葉湯

〜岩城のよ写又旅森〜



Small vertical text or stamp on the left edge of the page.

亭之也よ何く外ふ夢をよほひ越
 如のあまは病床より茶禱のふ
 ふまかして侘則法識の身在
 2のうりたれし二佛の二十三回
 中まふおろししる落し安ま
 茶飯も汁こもをそくし精靈
 のこほりたるをいかに持てうる
 持のこほりたるをいかに持てうる
 身はこも古の月えて何れ
 菱あつ田舎裏の月のふち中が
 身のこも何れも月をわらね
 李井の考新しき色月文
 月はこも友のあつてりり虎の月
 月落く声問ふ鳴れ色こも
 月つる新身をいかに木城が
 十身はこも月もあつてはつ

身はこも古の月えて何れ
 菱あつ田舎裏の月のふち中が
 身のこも何れも月をわらね
 李井の考新しき色月文
 月はこも友のあつてりり虎の月
 月落く声問ふ鳴れ色こも
 月つる新身をいかに木城が
 十身はこも月もあつてはつ

交りの清きる月よおとろけ
磯の月相も根をうづら
浪と花さきく月さきく
るふれ十五夜をいふ手枕
月の雨ぬきへて樹をい
いさよふきぬる月さきく
照流る鶴の古葉よさきぬ
き度くいさよふ月や海の
おろけもいさよふ月あり十
既望月さきくや舟の志をい

十九日常夜

きみも然いさきぬる
駒曳の土産城後海の舟
まつり新巻を森覚の初め
まつりやるの門田さき

大宮驛

下書

鷹のこゑ水川のこゑ鳩のこゑ

廿日北亭のこゑ

夕陽の月と名をきくこゑのこゑ

五石灘のこゑ

水阿とやうりのこゑ水阿とやうり
揺り舟のこゑ細のこゑ魚のこゑ鷹のこゑ
鳩のこゑうららのこゑ及古のこゑうらら
石のこゑうららのこゑうららのこゑ

水阿とやうりのこゑ水阿とやうり
川あわのこゑ水阿とやうり
此森のこゑうららのこゑ
水阿とやうりのこゑ水阿とやうり
いりうらのこゑ水阿とやうり
お茶のこゑ水阿とやうり
鶉のこゑ水阿とやうり
つららのこゑ水阿とやうり

ねまゝの酒や掛ふらへ来て喉を

麻島

月まわく小菰や神のつゝめ
ぬらひと蒸さくおのゝろりや
とまなす時雨もよまよ菰の音
わらわのつゝめもよまよ菰の音
しゝの音月半端の木間へ那
雲のつゝめもよまよ菰の音

旅立ちのつゝめもよまよ菰の音
江 鞋
沙魚初の附木もよまよ菰の音

田渡村

山あひま着るお秋や引板の音
分あもなぐしゝの音か
人のこぬまうや紫山も繪の音
年交の田つゝめもよまよ菰の音
まゝまの牛小登りゝ聖分が

十日新彼岩中日

馬の入ぬや袖又月を照
色くたりのぬもの買ひん
見と歩行多程の色の出ん
栗もや彼らんあうの袖もけ
是もまの時ゆかちる西瓜の程
茶の湯若新まの虫より露なる

大田城いりへ佐竹氏の

あやをぬりしとるり

西之是又木綿もくたうりお搦

直能大師

強頭や強船屋又とらぬあま
あやをぬりしとるり強頭は
舟場やまぐりまぐり舟の芸聖や
あつぬ火も消るるあまの芸聖や

戸志ありなきと信ず〜花
 うらぬ瓜ひと若うけ〜花根が
 さやいと通る人あり〜寸瓜
 木犀よ己剂の町汁や葉〜
 るくまのや梅土の〜祝お
 一霧よりぬ茶の〜梅猫
 里〜のりぬつ結や柿〜
 林〜さや仏るの柿とあ〜

松屋山観音堂より

里〜さんが〜

柿の木の栲とあ〜秋の色
 毛〜うらむの荷の〜
 燈のり〜亭梅の〜煨芋
 ま〜のの春につ〜柚
 ちぬ〜を冠ぬ〜山
 ち〜の〜愛〜体〜外

山よりうららかにけしきあやう

鶴澤は信濃のあまを案内也

小家ちのあいつりや木のま

運上山の價をきく

きつゝとわづらひあうれ

しづかに

おきこけのまは償ておのこころ

あまをさへお山あ葉落しあ

秋もちやまのあうりは落し水

二度染の浮写ききし落し

落しききし純みのうら

いとく植てゆきると田舎

かけいねや祿直ともみえぬ

船寒や西仏修火又故のまよ

客舎

薦枕のおとや夜寒は枕もと

むつうしとそめくさくぬきよき
ふと抱くさうよきふの風あまらひ

山家

爐のまたみ後摺と寸おるる
茶とつ穂と袖將おはあおるる
旅人さしとささくお氣ぬき
川つうへささく砦と藤あやうぬ
振表人のつうへささくお夜砦

室町を過りて

向のおろ江戶さすくに砦と那
田の畑さぬき九月のあやうぬ
菊のりおささくお女の子

方々華き

巻物しるや画と交りよきお家

五月のあやうぬ

まのりよき聞ぬき菊の九日なる

葉恩入無為なまらひのふらり
と鳩鷹のうらぐひとくしのこせ
ふよはひのまなつちのこし
そくと別らふちのまなつち

新入道し良よりす

年よりけり別毛の菊のまなつち
蘭の種をわらふやの後の月
後の月袖柑を捌くまなつち

鶏飼のぬまのあつちや後の月
後の月ひらひらとをくまなつち
一坐する他人のまなつち後の月
あやしくまなつちのまなつち
曾過や月のまなつちのまなつち
来合まなつちのまなつち

辻村

新葛まなつちのまなつち

新とまのな際をりり切らあ
新とま又藤とうらあふ口結り於

是神の如き禮

而りてさびのつくりやし生美節

莊經神漢のややく五百里

あらぬ

菊の盛りたらしむの色遠し

曾子曰脅肩諂笑病于

夏畦

華より来て流る人もや言はる

三品考より即母子上京

朝風や菊の十口を門送りの

海井葉の心の植木屋とも

華の盛りけ又お二帆を舟にぬ

糸のうらまのやうなさほく

のこちを造り出くさるる見

ん〜人〜

〜

芋汁煮〜

船酒も貯〜

〜

〜

〜

若ふ人〜

貞昌大師一周忌正午の祈り

中〜

〜

中〜

〜

〜

〜

〜

白くくや白ひ言うて蝶も来た

田家

柴久の鳥お電のくく如林西さ
柴久のや枝も月又藤もや
かといまひ人もさよふや
柴久の香も光やーりん
山もー向やちー一菊も
柴久くまのさよふおわの中

拾遺抄のまをりきーハ誰人
の巻をたりーマヤ

古本にいろいろ昔も奴後三つ
一五十日はるおもさをあさ
日炭俵のうつりさうあく
昔の何れも海をかうあふ
良も、抄の句冠の字も
らるるさうあふ

かきしをうけも月花のみちか
あまのうらみもさきとらふよるな
つよき

友り針てお祭より人をもてあしり

玉島村玉島庵古観音堂

滝壺やお祭よりあしり口はあしり

矢脊よりあしり人をもてあしり

お河よりあしりあしり三品氏

又中寸

竈風もよおしあしりあしり
臭いよあしりのあしりあしり
お祭よりあしりあしりあしり

護國寺

窓のあしりあしりあしりあしり
あしりのあしりあしりあしり
推のあしりあしりあしりあしり

高野山林麓

榎の葉より遊女もはあり学文路の
智月の入りしや尾越鴨

治の西代もあふくも武備も

おらこころをたよめて侍大将候

の羽をとりし騎歩郎等のこ

くひ六具さるる旗さるる物い

先くくよらひもては金巻の兵

難小荷跡さへて一為五千人学

碧衣といひは嶺野もさるる

猪猿雉子あふる物也さるる

魯実を平楽土の社観あり

時天保三年辛丑五月五日

いさ師や尻鞘うけて小鷹うり

末よりや小荷跡いさく一備

免場よりちあふさるる木

石徑如字の三十一 通者一復
少一六八 函文をいゝ多ひも 誦

しゝき

障もさく人をやすお秋のくを

鵲岡山帰歌古

聖人の海らや 考りて秋の暮

己教をまじり 聖のおまを

いゝい 魂や越路の月とま

あゝあゝ丸末お士追悼

冷やりと顔又何やう秋のくを
世る若のつも過ぎり秋のく終
神代もあゝをまゝのを秋の暮
あまのくを目ぬの魄のくまゝや
遠藤さへ春中まゝさうり秋に暮

福智系

とありてさゝ 聖言をあらぬ秋のく社

協の葉又何もさうして秋のこゝろ
小およむる夕陽も秋の夕の那

若非仙一周忌

秋の山へのあそび一月も一巡り

秋山の題をとりてわらわん

無常なるありぬ

とる度しとるをまふの高きうた

お露霜のま木もさうあそびわら

梅令多の春襟を脱しといまわ

忍月妙國寺の阿つりり

信の心吹言

末うれやまゝもあそび踊すを

末う終や夕日は木瓜のうらや

馬繪言若神一松とこうり

ありく誠

繪言葉のぬらふと終や九月お

色やきく暮のまなや九月盡

三品氏より

九月おとせを二夜のありあゝ

うりそめの旅ね

おのこも口毎をなめて

老るゝ勢もあや秋の〜を風

籠もはや一志のり〜の方ね

草枕〜も秋と〜るり〜

柄の色やを紙遊のめや〜き

月能出〜峰も〜るり〜

綱〜り〜も頰〜あゆ〜

羊穂の密も秋の由〜

大橋

行あま〜や中洲の巻ねらら〜

ふ新木を海〜り〜

〜李城〜

此と世帯ノ車ニ後トあむれぬ

泊船ちよあし

はなみよあし

り秋や遠きあし芭蕉堂

新橋思葉冬之歌

十月や臨木の下路きりく

年賀

あしりあきまのよらなや九十月

馬の尾如地や何處迄神ノ道

小多きく藪の口あし神のあき

小多きく藪の口あし神のあき

根津權現

神「延」留守時兩將也
あまのまゝや 園十郎や 八代目
遊磨名や 楯平のくまのい
あまのまゝや 流の板一 材のい
まを城名
あまのまゝや 子の細さや 多枝お
龍波おろし 二はくからきて八筋

川より入るまゝを流る事

つり一程二句

その買は漬入上にお 飯の日
対る會や 三年の旅を 徒し寸
まをまゝや 糸又一度の高き
此色や 町をよ 似たり 飯の日

十日

十の栲おろし 糸をく 舌掛る

わがこころの天の鳥餅やまのつゝ
家やとを棧欄の光の玄格の如
き此月の降子をいつとお夫 議
鶴の啼くももははるゝと 議
赤の針の餅の花さくしと式るる
ふた葉の漢中もりの十たるる
木能くも若のるらほ取こゝ
るるの君ふふ春の日はの難

莖桐の葉のけと寸小くは
山障も葉を出て遊美小くは
つとく乃取取わし初時白
筆とくもものくも初時白

ふ屋敷のちりす

まの晴雨の林檎の花無白のぬり

宗雪のちりす

まの晴雨のちりす 汲水のちりす 板葺

あゝ家まゝ

とくして牡丹さゝせる時ふか

位竹ちり多きるをさうり立

たうらむる架の夜摺り

小娘の國へ出らむあまのこ

順禮の歌はあまのこあめり

旭洲よりあめりあまのこ

あまのこ

小娘の國へ出らむあまのこ

破笠の歌はあまのこ

うけて授かる採華は二十三年

あまのこに破笠のまゝれは

紅糸竹のまゝさへ

あまのこあまのこ

あまのこあまのこ

あまのこ

梅うゝと時向のま——りある境ふ

根のなまぬりりし時

久ききりし——寸まきり結り物

八幡雨

——くせは新や藤まきおろし

大津津の目

是帆の後時中らば——くきり

種やうつこお森やまきり雲まき

い——りの世や又さら又時向まは

楽電の不き海りまき出まきり

木欠るまきり小きや又時向らり

雲らりまきり減——くきり物

物らりまきり赤や雲まきり物

八景の画まきり橋のまきり物

比まきりまきりぬつまきり時向ら

一葉乃まきりまきりまきり那



Handwritten text at the bottom left corner of the page.

時晴や餅さきさき草まき 雀

利根舟中

中より行帆繩を話交霰の那
黄多の笠もや河を流すく終
三日月能く今夜も彼より終見
初柳の粉もさく新のしき
時晴の會式乃花の賣物なり
可いよ夕日のうらりて時をよかり

雪尾

森あまのや又の時をのさし
祓もさし霰青なり酒堂なり

山上氏旅宿

志くもや兼師の旅宿よりさき
掬むく軒や時をさるし
みよふものたへりし時を
行燈の丁より花を少飲時を

枝をともすく舎輝や大根引
風のそけしら出しりり菜菔曳
塔の出ぬらり麦まくり和ら那

蕨鴉圃と通りたにぬら

の嶽種をばんていりりか

あけのそらさしりり

麦詩やま^{マコ}海のあらしをさ

いあえんらりやあ黄柳のあらし葱

あけのそらさしりり葱控らりいああをの

裸をの華あしり根深引

あ右しり花もほろろあ汁

あ由許あしりこらあ又塙根しり

あ許あしりしあの餅もあしりり

ああ物まうまらしりりああ

目まらりりあしりりあしりり

趙飛燕

妹身一飛ちらりて不田りし身

湖月抄

物うり誰力のうへを冬牡丹

をほらぬ敷りしあとのま置る

尺為人の袖は色紙あり冬牡丹

冬ほらぬ障り身しるもりの白紙

山茶花はふほきもや吹矢留

茶の花の咲たる祠堂高く物

茶の花や雪りしと茶下りて

茶の花は福く志し聖所あり

茶の花やまらけし祢匡の秋葉の

葉のまらけしもらけして石路の毛

冬しるもりしおつり花の毛

山茶花前

旅人やうり花 辻うら

年しるもりの骨片も 柳をま

手さすけとふと馳ぬ帰 花
 口之斜 花ぬけの空を晒 花
 見ぬ之友 見ぬはさう 肉を
 井の心をに咬とさう ときふさう
 ちりり又さう 門の金剛慕う友
 粒及て陣 垣根のつさう 那
 すぎやう 花鶴はあやう やむの花
 夢覚てふ心の目ぬく いろの花

樵の花ふらきとさう 狐 畏
 家根語 ありさう けりかやのさ
 神の化ひさう 花鶴はあやう

蘆野

ありすけとふと馳ぬ帰 花
 水仙や人知らさう 花のさ
 白粥又釣さう 清さう 花のさ
 ありすけとふと馳ぬ帰 花



寒菊や音の世に任花法師
空華やうりし出ぬりやう細工
冬菊やうりしうりしうりし
うりしうりしうりしうりし
嘉年宜くもりしうりしうりし
かんきくもりしうりしうりし
元物橋と角つりしうりし

のりしうりしうりしうりし

口阿しうりしうりしうりし
里霜の穂田やうりしうりし
弘法寺

無葉屋又亭楠もてりし紅葉
木坂やうりしうりしうりし
月と枯りしうりしうりし
安さぬもりしうりしうりし
就終やうりしうりしうりし

清見寺

深の谷やちた跡のしきくさ
深をよりし狐の穴やも由木立

神護寺

冬木立岩身古跡の筆の跡
不ありとくさくさ交りくさ烟能探

狸のつとて

高城又何の離るるきり月

冬の月暮るに松葉如落つる
武家町や人の心とくさくさ冬の月
冬枯れや無苗の花揚る森ん
ささ帯や一月も終ふけり
ささ帯の葉代りくさくさ垣ぬり
手滑し一人行過ぬる十之
西月もあく家くさくさ鶴
えり時木免曳足たり鶴目谷

多しうやあまののちや梅変
うつろひの風もあつとまれば
阿つら向ふあぢくあめ浮森れ
あつらな田一あめ浮森れ
流るる茶屋もあめあぢく

十月十日は既川岸より

浮森れあぢくのあめ茶色しあめ
あぢくあめ長者あぢくあめ沈のあめ

あぢくあめ枕より一のあぢくあめ
あぢくあめあめあぢくあめあぢく
あぢくあめ川にあぢくあめあぢく
あぢくあめの夜あめあぢくあめあぢく
あぢくあめあぢくあめあぢくあめ
あぢくあめあぢくあめあぢくあめ

加茂川や流石千鳥に袖あぢく

六玉川といふ地名ありしなり

やうき

調物やしも多しうまなくしら梨

梅令あけりつるをさくしきり

の舞臺ひききりしりしり

廿年のまじりしりしり

題詞さくらりて

仁右衛門の素襖おきしりしり 衛

燈明りの踊踊ふ家や鴨の聲

のなごやも降るおきりしり

法ある日城脊中と鴨のほぬ哉

月代とわいさきか毛乃起りしり

阿比もちく光りしりしり

まきまきしりしりしり

青竹と枝つりしりしり

力多しりしりしり

たゞも思ひ見し人か好し暖き
ぬくも多人のうへもあはぬ
若非きよこの世あはらぬ

城見し

つくしと芭蕉に霜の夜うら

琉球人來聘 留

海山やまもつれきお霜の夜あは
う免様うらまの人の日や立ぬ

名北仙百箇日

かきものわらうらうらとまきくは霜のうら

九つとわらうらうらとまきくは霜のうら

母人とおくはくはくはくはくはくは

たゞ地砂あつたおまひやうら

おまひうらうらと霜のうらや霜の鶴

旅うらうらと霜のうらや霜の鶴

里も人まき霜のうらや霜の鶴

玉河のそと新しき馬のそとくわく
然る所の傘はまのちや玉 瓦
松のまは新しき馬のそとくわく

霜月下の松石と

南田川にまたる松

柄金煙お花の灰紙の吹飛
み花のそと新しき馬のそとくわく
松のまは新しき馬のそとくわく

初雪お花のそと新しき馬のそとくわく
初雪や賤くまのぬの母の草
初雪のそと新しき馬のそとくわく
雪のそと新しき馬のそとくわく
乙雪のそと新しき馬のそとくわく
象のそと新しき馬のそとくわく
雪のそと新しき馬のそとくわく
雪のそと新しき馬のそとくわく
雪のそと新しき馬のそとくわく

〇

下巻

雪乃戸や蘇や雪すれ人のも
降埋ちるも世にちき雪廻庵
落ちや留禁ほほあるも雪の
吹きる果あちつく粉ゆふ
吹廻寸雪身もさつく初雪あま
狩人の出くわく雪のちか
雪の日や梅田の雪のちか
雪のちか

床の町や雨ちりけ紙葛の雪

晋のちか雪のちか
月夜雪のちか
價や白商人

うら 鮭の雪のちか

十月廿日新標屋敷
梅のちか
雪
曇

會津山中

ひつるに糖の麻や雪の脊負子富
り汁やたら涙より雪 実
雪志まく吸も雪やうう掛
舟と無いもの影も雪志ま
まうつれと雪降や尾長お庭きり
尺と馬の人さうの雪や雪道磨
尺と馬の人さうの雪 尺と馬

晴晴の次女もうけたらさう

→ 阿なも母もさうさう

集一とさうさう

かり扱めの世もさうさう
居回りもさう引よさう巨梅さう
ねさうや巨さうつお雪の意 臭さ
禮食の代もさう尺うけぬさう
あささうさうねらさう
あささうさうさうさう

森はりのま公あまき湯婆の乳
たうもあまき思ひしんり
吾人の顔きあけしる炭火の
借きつる炭火のまを
すく賣はつしんり子守の
衆人のまにりりや熊野
まのすく強りの山葵の白ひり

旭洲亭

何れも落つてまきやけ

多摩

焼くまの炭を流してあまの月
うつるや揚餅のまに孫り
埋火やまの種にあまの
俵を越さく啼あくや桐空桶
白くぬの籠さひま桐火をけ
まこれのま桶のま治る元大を

の

上

物いつち路中をつゝお庭に
あつちあつち心頭中や
角路中をたつと志はく
舟は出るといふ所の
あつちあつち夜毎に
あつちあつち机前
あつちあつち小窓
あつちあつち燈籠

路中つゝ人のあつちあつち
あつちあつち花あけ
あつちあつち旅
あつちあつち靴あつち男
あつちあつち

あつちあつち
あつちあつち
あつちあつち
あつちあつち

吉人立對の爲の馬つた
赤きと黒きを混ぐ安田氏の

櫻里氏祝詞

此よりや日ごとく臨み給神の意

云ふが如く祝

梅の子にあらく若葉の襟に那

新ころ又買ふや信する心

山休もたのまは吹草のりや

横ふや誰あつる心祈敷

跡たなき雪もあましく西へ行

盟のおもひもそ新あつた

跡たなき雪もあましく西へ行

さよふと心もあましく西へ行

る木へさよふと心もあましく西へ行

落柿合へものごとく心もあましく西へ行

まのたき葉もあましく西へ行

古今著聞集

昔よりけしきありあはれをよめること
ありしもの語をいへ

恋よりけしき中へ上達歌
ありしやれし女乃ゆき
あはれあの人おわくや里より
は火舟や雪にまじりて
花舟ありしは

日の下へは貪るものありしは
夜よりけしきありしは
月雪の積こりて
世のありしは

世をよめるものありしは
いふ事ありて芭蕉のいふもの
ありしは
よあはれ帰るは

三折一欠戸桐の影の袖のめり

臘月十日

安國殿お膳見形と云ふは

湯城ひぬ身よりくらくの梅

世とのうきうきはかきこひ

るるあはれ臘月十日

忘れたる梅の影

折る梅や口中の雪の糸

冬梅や生り酒屋のあつ

空梅や何やう備後瓜

大庭の休一書きや

雛子鳴くむのをさや

よまう一寸雪吹の中や

病後

春の梅や春の梅

春の梅や春の梅

高し仙無二力の蝶とましく第は
袋戸より粽乃々や蝶々
すまきこや鶴も驚く解つら
と一名の所をもそはまはし

上野六行

す拘てまつるち師の回り月

天岩ちのうら門を通る抜を

高し仙無二力の蝶とましく第は

高し仙無二力の蝶とましく第は

高し仙無二力の蝶とましく第は

高し仙無二力の蝶とましく第は

高し仙無二力の蝶とましく第は

高し仙無二力の蝶とましく第は

高し仙無二力の蝶とましく第は

高し仙無二力の蝶とましく第は

東よりけり西に行中なる漢上

わが家のいしをくちりぬるのし

春をよこぬや葉の如の穴のし
うらな紙もふて唐のまを
先うまきとやあそび待りたり
仕さうけし程のまをの梅

あま岩山

よく晴れて安房山をゆく

臘十八日

あまやるのしをくちりぬる

浅草寺

うらな紙もふて唐のまを

上野

院へ入りまきく唐のまを

佃島の年終まを

吹出すの光りやあま
箱館のまを

おのの深衣一甫一

あつた年高は言はれぬ
年高を身又養ひて
老る年高は是れ
交人やうの世を
儉やうに
きぬ配う所は梅

あつた年高

あつた年高は言はれぬ
年高を身又養ひて
老る年高は是れ
交人やうの世を
儉やうに
きぬ配う所は梅
あつた年高は言はれぬ
年高を身又養ひて
老る年高は是れ
交人やうの世を
儉やうに
きぬ配う所は梅
あつた年高は言はれぬ
年高を身又養ひて
老る年高は是れ
交人やうの世を
儉やうに
きぬ配う所は梅

古調

梅一里ん切多り越ん多の可奈

大抵母の十面志をとりこす

法道よまぬりけく

身つゝあつた年の名くは免糸

須美田川唯り

雪とらや大梅りの梅とらひ

左尔喜岳とらにきやまたに

あやま

とくくや大つららめ梅まひ

羅漢寺のうらみ

大年やあま越あつらつら入

あふらら河らららら返おれ鐘

いひ残すらららつな除おのね

ふらら羅漢越ららら森ららや除夜の鐘

安政二年丁巳秋
不沙尾南書

伏久粗年刻

新橋思藤終

一具葬一具小傳
一具庵一具姓高梨氏羽
村山羽楯呂村人弱冠離家
游興州入岩城專禪古師事
良孔上人削髮學禪學成而住
禰嶋大圓寺。其風漸法化。晚味
道風且盡能誦之連歌從先達

乙二道人時習之。道人達其我。
以心傳心。是以其語作句。若接。
文及中。讓於弟子。任意以。
脚東西。遂來。結交由誓。由誓以。
力莫逆。一且僑。於中橋北橋町。
為其所。相賢也。一具性剛毅。不。
文飾。初。初。人。學。為。何。人。決。

而與羽水越及松。向。相。飯。之。知。音。相。
識。者。與。致。步。之。徒。屬。性。來。而。其。在。
於。隣。里。之。人。為。語。曰。一。具。師。者。吾。家。
之。師。也。是。仙。臺。乙。二。公。謂。之。為。乙。蕉。
門。一。代。辭。宗。乙。在。都。下。操。持。一。家。
不。出。何。處。乎。於是。初。人。始。知。
其。為。有。德。之。人。入。門。肄。業。者。日。

多。時嘉永六年冬登鬼錄。多七
十有三。其語終也。有云。夫聞之可記者。一
月每月十日。或杖突涉。或觀其音。報
師恩也。十七日齋戒。往奉拜。緣山
安國殿。或國恩也。若云。自詣。必使
以人代已。又遠近諸家。又書。隨來
隨折。未幾而之。是歲癸丑十月十日。

芭蕉忘。與生徒。夜坐。冒雪。伏枕。為
月。至十一月十七日。課已三年。於此休
浴。弟子知其所以而止之。一日不聽。徐
步到。友生。盧月家。而沐浴。不快焉。
主人為調精饌。供之。一具。以之。謝之。
好之。昔月家人。或流炭火鑪。或進
衾。一日。靠衾。與主人語曰。貧。是別

子在延。以不逮見來人之再來。雖然
吾不願以病煩人。死則速死可。
歡語數刻。頗入佳境。家人亦自
傍中。之。相與祝千秋。俄而一息。催嗚
氣。請喚壺。中。以。驚。急。取。臨。進。一
具。包。吐。盡。之。以。食。物。而。歎。以。為。藥。不
及。一。亦。不。能。感。辱。出。云。大。抵。去。因。章。

死到。涕泣。執。子。近。者。我。為。余。叙。重。而。云。
昔日。師。自。言。徑。及。某。某。某。某。告。之。曰。吾
明日。閉。眼。也。葬。必。從。舊。送。喪。去。勿。過。
汝。亦。三。四。人。他。身。以。願。家。之。預。則。火。之。
骨。身。流。之。吾。生。前。自。由。向。死。後。何
假。他。力。為。鬼。或。佛。誰。能。知。之。勿。信。
香。花。勿。當。追。善。是。為。貴。也。先。生。沒。

每有仙臺未月。左遙有書。州唐。清。其
句。未之序文。師。其。而。題。數。言。新。然
述。其。河。嶺。以。其。質。居。之。風。韻。遂。絕。其。筆
于。此。云。余。集。錄。其。前。後。以。聞。者。以。為
一。具。翁。小。傳。也。是。

安政二年十一月十日 海西漢夫戊申撰

